

日本の色④ 紫紺色：土俵の上の吊り屋根に張り回してある「水引幕(みずひきまく)」の色。この幕は土俵上で散らす「勝負の火花」を鎮める意味があるという。



Makiko Uchida

内館牧子(うちだて・まきこ)氏
脚本家。秋田市生まれ、東京育ち。武蔵野美術大学卒業後、三菱重工に入社。13年半のOL生活を経て1988年に脚本家デビュー。現在、東北大学大学院文学研究科にて「大相撲における宗教学的研究」を進めている。横綱審議委員会審議委員。4歳から大相撲の大ファン。OL時代は「親戚が亡くなった」と言い訳しては相撲を観戦した。「仕事がつまらなかつた時、小さな横綱・千代の富士の勇姿に元気をもらった」。相撲を題材にした作品にNHK朝の連続テレビ小説「ひらり」がある。

土俵祭り 相撲が神事だと実感できる行事だ。本場所初日朝の朝10時から30分行われ、無料で見られる。行司が「故実言上」と言われる土俵祭りの由来を述べ、土俵中央の穴に「榎(かや)・勝栗・昆布」などの鎮め物を納め、日本相撲協会役員や参列者に神酒を回す。土俵を清めて鬼気を払い、興行が無事に終わるよう、また力士にケガがないよう祈願する目的で、江戸時代から神道の古式に則って行われる。千秋楽の最後には、土俵で新弟子たちが行司を胴上げする「神送り」という儀式を行う。



土俵に神を迎え、酒で清める



館内に数店舗ある売店。弁当、力士フィギュア、力士型チョコレート、力士の名入り湯飲み、力士バットなどが手に入る



相撲案内所、通称「お茶屋」。チケットはお茶屋を通して買う方法もある。酒や肴、土産などを席に届けてもらえる



相撲の取組があることを知らせる太鼓の音を聞きながら、朝8時30分の開門と同時に入館。粋な力士織に気分も高まる



一月場所で全勝優勝した横綱、朝青龍の土俵入り。腕で六百貫の邪鬼を払い、塵を切って身を清め、拍手を打つ



写真右/取組の始まりは朝9時。幕内力士が登場するまで観客は少ない。土俵周辺の空席で観戦できる
写真左/夕方「中入り(なかいり)」=十両取組と幕内取組の間の休憩時間。満席の1階で声援を送るもよし、2階から観戦するもよし

神事としての相撲

相撲の起源が神事であったことはその歴史から分かる。それを実感できるヒントが国技館の隅々に潜んでいる。その一つが「土俵祭り」「神送り」などの行事だ。

相撲の歴史：五穀豊穡を願った神事から始まった。神々が「国譲り」の争いを力比べで解決したという神話もある。公式の神事相撲の始まりは726年と言われる。凶作の年、聖武天皇が神社に祈願したら翌年豊作になり、お礼に相撲を奉納したと伝わる。戦国時代には武術として、江戸時代には神社仏閣の建立、修繕のために寄付を集める動機として広まった。明治政府により一時禁じられそうになったが、保護派の努力で免れた。第2次世界大戦後、1954年に東京・蔵前に完成した国技館にて相撲が盛り上がった。85年には現在の両国国技館が完成した。

相撲を楽しむ基礎知識

- ① 番付の地位：下から「番付外」「序ノ口」「序二段」「三段目」「幕下」「十両」「前頭」「小結」「関脇」「大関」「横綱」がある。幕下から下は付け人の仕事もする。十両以上を「関取」、前頭以上を「幕内」と呼ぶ。地位によって場所中の取組の回数、給料、着物、履物、付け人の人数など厳しい格差がある。
- ② 呼び出し：控え力士の土俵への呼び上げ、取組の合間の土俵の掃き清め、本場所や巡業での土俵の構築などを行う。行司や呼び出しにも格差があり、早い時間の取組ほど下位。最高位の立行司、立呼び出しに至るまで彼らを見るのも一興。
- ③ 相撲教習所：相撲協会に登録されたばかりの力士が6カ月間通う学校。相撲の実技、教養課程など6教科を学ぶ。場所中、客がちゃんこを食べられるのは教習所の教室内だ。壁に張られた「力士修行心得」や「時間割」などから新弟子の緊張感が伝わる。
- ④ 館内FM放送：13時過ぎからはFM放送でNHKの解説や館内オリジナルの番組を楽しめる。ラジオを持参しなくても保証金2000円で借りられる。

開門からはね太鼓まで、国技館1日滞在は驚きの連続

五穀豊穡を祈る神事

大相撲の1年も一月場所から幕を開けた。横綱審議委員であり、相撲をこよなく愛する内館牧子氏に、相撲の楽しみ方を聞いた。

「相撲は勝敗だけを重視する「スポーツ」ではありません。原点は神事であるという背景をぜひ理解しておいていただきたいですね」

相撲の起源は五穀豊穡を祈願する神事だ。人が神と相撲を取って負ける演技をし、神を喜ばせて豊作を願った姿から「独り相撲」という言葉が生まれたほどである。

また内館氏は相撲にはビジネスにも通じる学びがあると話す。「例えば横綱の免許状には「品格、力量抜群につき横綱に推挙す」とあります。力量より品格が先に来るわけです。取組で目上の力士や、自分よりも体の小さな力士に「変わり身」で勝つても評価されません。実力や体格で差がある場合も、真つ向から勝負する。それで負けても楽をしない経験が、力士を成長させると教えられます。この考え方はビジネスの世界でも同じではないでしょうか」

相撲、神に捧げる儀式

連載第十二回 日本の国技を知る

真の国際化とは自分の国を知ること。相撲は単なる格闘技ではない。神事に基づく日本を代表する文化だ。その神髄に触れる。

土俵の上、吊り屋根の四隅の房は四季と四神を指す。「土俵祭り」で降りた神が四隅に宿る。「東は春、青竜で青(緑)。南は夏、朱雀で赤。西は秋、白虎で白。北は冬、玄武で黒」。1952年までは各色の布を巻いた柱が建っていた。

渡辺幸裕(案内人) ◆文
text by Yukihiko Misunabe
稲垣純也、寺尾豊、本間高志 ◆写真
photographs by Junya Inagaki, Yurika Terao, Takahiro Horino

さらに深める参考情報…

【書籍】

『大相撲力士名鑑』(『相撲』編集部編、ベースボール・マガジン社)

『I am a RIKISHI』(横野レイコ著、扶桑社)

『満員御礼!—大相撲なんでも早わかり』(銅谷志朗著、講談社文庫)

【ウェブサイト】

日本相撲協会
http://www.sumo.or.jp/
SumoNow!
http://www.sumonow.net/
相撲錦絵
http://www.sumo-nishikie.jp/
会員制有料サイト ジャパン・ナレッジ
http://www.japanknowledge.com/

【告知】

日本かぶれの会
五月場所 千秋楽を見る

五月場所の最終日をイス席Bで観戦します。当選者に前もってチケットをお送りします。朝、入館すれば取組を土俵付近で見ることができ、入館後、相撲関係者から直接話を聞くチャンスもあります。表彰式後、「神送り」の行事も見られます。お気軽にご参加ください。

日時: 5月22日(日) 開場8時30分～
結びの一番は18時頃(集合時間は自由)
会場: 国技館 東京都墨田区横綱1-3-28 Tel 03-3623-5111
募集人数: 16人
参加実費: 4900円(イス席B料金)
締め切り: 3月4日(金)
応募方法: http://nba.nikkeibp.co.jp/yamato11/で必要事項をご入力ください。
発表: 参加者に直接ご連絡します。
問い合わせ先: info-nba@nikkeibp.co.jp

— 相撲を観に行く装い —

着物は茶色に薄茶の縞が入ったモダンな柄の小紋。これにお召し羽織を合わせた。紺系の博多帯に、玉つきの羽織紐でおしゃれな着こなし。(渡辺幸裕)



着物はチャコールグレー地に童の柄。可憐な雰囲気です。少し改まった町着。帯はピンクを基調にグラデーションを入れた袋帯。(堀野紗恵さん=読者、看護師) 着物撮影協力/銀座もとじ

案内人・文
渡辺幸裕(わたなべ ゆきひろ)
ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機にビジネスパーソンのために日本文化超初心者向けの会「和・倶楽部」を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。

国技館の楽しみ方

相撲を観るといっても、ずっと席にいる必要はない。館内を歩き回ると、ここかしこに発見がある。



ちゃんこ鍋: 場所中、昼の12時と14時に200円で食べられる。正午に会場に行ったら既に約50人が並んでいた。日によって味が違い、写真は醤油味。鍋料理だけではなく、力士の食事を総称して「ちゃんこ」と言う。料理番を「父公(ちゃんこう)」と呼んだためとも、中国の板金製鍋(チャンクオ)料理の手法を取り入れたためとも諸説ある。



お土産: お茶屋で買える。写真は竹セット(5270円)。ほかに松(7370円)、梅(3170円)がある。



土俵: 近くで見ると所々亀裂が入り迫力がある。江戸時代には力士たちが円形の土俵で囲み、その中に相手を倒すか外側に押し出したら勝ちとしたという説もある。ケガ人が生じ争乱の原因ともなったので、人垣の代わりに、土を詰めた俵を地上に置き、相撲場の境界線としたのが始まり。

チケットの入手方法

日本相撲協会の切符売場(03-3622-1100)のほか、各種プレイガイドで入手できる。会場などにより料金が多少変わる。例として一月場所のチケット料金を紹介すると下記の通り。溜席(土俵下の1人用席)1万4300円、1階樹席(4人用に区画された席)3万6800~4万5200円、2階イス席3600~8200円。このほか、当日券や団体入場券などもある。

2005年本場所予定

場所名	会場	開催期間
一月場所	東京・国技館(両国)	1月9日~23日
三月場所	大阪・大阪府立体育会館	3月13日~27日
五月場所	東京・国技館(両国)	5月8日~22日
七月場所	名古屋・愛知県体育館	7月10日~24日
九月場所	東京・国技館(両国)	9月11日~25日
十一月場所	福岡・福岡国際センター	11月13日~27日

本場所のほか、各地で巡業あり。

国技館、そこは「日本」だった

今日の大相撲の源流は奈良時代に始まった「相撲(すまひのせちえ)」。宮廷行事に廻り、これが芸能性の原点になっている。外国人力士が増えるなど、その景色は変わっても、相撲は時代に合わせて変容しながら存在し続けているのだ。

とはいえ多くの若者にとり、国技館は未知の場所だと思ふ。そこで初心者にお勧めの楽しみ方を高砂親方(現役時代の四股名は朝潮)に聞き、左記のアドバイスをもらってその通りに実践してみた。

一、場所初日前日の「土俵祭り」を見る。二、取組当日は朝8時半の開門と同時に入館し、取組を行

う9時から18時過ぎまでを館内で過ごす。三、昼は国技館内の相撲教室所で200円のちゃんこを食べる。

詳細は写真を交えて上に記すが、国技館での1日は新鮮な学びに満ちていた。力士の闘志に心を打たれ、力士が土俵から叩き落とされた振動に驚き、幕内力士の登場に従い高まる客の熱気に包まれ、横綱の迫力に圧倒される。「百聞は一見にしかず」を実感した。

アソシエ読者には少しでも事前学習をし、ぜひ国技館を楽しみ、相撲に親しみ、日本を感じてほしい。国技館は上位取組の格闘技を見る「競技場」ではなく、日本を感じられる場所であるのだ。

奈良時代からの芸能性、勝負事としての競技性を観る